

箏曲《六段》の歴史的展開

伊藤和雅（学会員）

八橋検校の作曲とされる箏曲『六段』の演奏と、グレゴリオ聖歌のクレド合唱の融合を聴いた。ヨーロッパ中世・ルネサンス音楽史専攻の皆川達夫氏は、曲の計量音符である六段の各段 26 小節、各 104 拍、合計 624 拍などが現代の五線譜で整然と重なり合う、という。しかも、デウスの意志表示部と音楽的強調も同じで、違和感なく重なりあっていた。六段の成立に、クレドの影響が決定的に大きいとの問題提起に、私は魅了された。

時空間が異質な筈の楽曲である箏曲六段がなぜ類似性を持つのか。その誕生と関りを持つ時代と地域は、佐賀藩誕生期の肥前と筑後の久留米ではなかったか、史料を模索した。

信仰を深め弘めるために聖歌は重要な手段であった。仏教社会にキリスト教弘布の楔を打ち込むのに、盲目の琵琶法師を利用した。法師の聖としての徳性、神仏に関する知識、そしてヴィオラに似た楽器、琵琶を弾きこなして『平家』を吟ずる能力は、聖書の物語を謳わせるのに最適であった。その候補として唯一史料に残るのが、法師の中でもザビエルが見出した肥前白石領出身の琵琶法師ロレンソであった。ザビエルの期待通り邦楽史の中にもたらされ、街歩く仏教徒でさえ口ずさむ程クレドは切支丹時代の日本社会に浸透した。

その後、信長の死以降排教の危機を誰よりも察知し、キリスト教の中心的聖歌であるクレドの延命を図ろうとした人物はいたかを考えた。しかも、キリスト教宣教のためにも、謳い慣れない外来のラテン語聖歌のメロディを正しく謳えるように、聖歌のメロディを布教地の楽器で伴奏を支え補強させねばならなかった。その能力を持ち得た人物は、信長らに「日本の長老」と認められ、宣教最大の功労者で音楽の才能があったロレンソであろう。

秀吉以降徳川政権まで愈々排教を迫られ、切支丹全体として危機感を共有するに至り、その意思を引き継ぎ得たのが箏演奏の伝統ある久留米藩の善導寺近くに住したドミニコ会の酒井太郎兵衛である。彼はクレドと箏との接点を持ち得る可能性があり、ドミニコ会の本拠地鍋島領鹿島との密接な交流があった。偶然にも佐賀藩では善導寺との交流の結果、全国で唯一箏の演奏が生まれ、同藩の文化史に生田流の曲名「六段の調子」が記されるように近代まで伝統があった。そうであれば、クレドは佐賀藩でも醸成された可能性を持つ。

そのドミニコ会と、これを最大の切支丹排斥者とした佐賀藩との接点は何か。国内唯一布教を敢えて望んだドミニコ会に、鍋島勝茂はこれを認め慶長 13 年に教会の落成をみる。それは勝茂が江戸時代初め、ドミニコ会士メーナの「捨世の伴天連」として、ひたすら自他の靈魂の救済に努める彼らの精神に共感したからである。勝茂は、中世天台の真盛の姿や、それ以前に『金光明教』で知られるように、釈迦が飢えた虎親子にその身を投じて救う菩薩行の「捨身飼虎」を描いた法隆寺の玉虫厨子の図に通ずるものをみたのではないか。